

# 函館とイザベラ・バード（4）

大野純子

## はじめに

イザベラ・バードは1878（明治11）年の日本旅行で新潟、函館、神戸における宣教報告を『日本奥地紀行』に記した。新潟は宣教活動の規模が小さかったので、函館が初の本格的な報告になる。本稿はこの報告について検証する。

キリスト教各教派には「伝道・宣教・布教」「牧師・神父・司祭」等、多くの用語の違いが見受けられるが、本稿ではできる限り一般的な用語を用いて統一した。また、明治初期においては各教派の日本での正式名称は流動的部分があったので、「ロシア／日本正教会」を「正教会」と記述し、「英国／日本聖公会」は「聖公会」としたが、「米国聖公会」との区分を明確にする必要がある時は「英国聖公会」とした。バード著『日本奥地紀行』の引用にあたっては、金坂清則訳の完訳版1～4巻を用い、引用部分の巻数、ページは「完3－21」のように記した。原著は1880年ジョン・マレー社版の電子版を用いた。

## 1. バードが記述した函館の宣教事情

### 1.1 四つの宣教組織

バードは第38報で函館について語る前にまず、「蝦夷」という節を置き、北海道の概観を述べている。函館の宣教状況については

ここはこの島〔北海道〕の伝道活動の中心になっており、現在、ギリシア正教会〔ハリストス正教会〕、ローマ・カトリック教会、

英国教会伝道協会、米国メソヂスト監督教会が伝道所を置いている。

(完 3 - 25 [ ] 内は訳者による補記。注番号は除く。以下同様)

とある。以下に原著のこの箇所から組織の名称をあげる。番号を付けて並べると

- ① “Greeks”
- ② “Romnists”
- ③ “Church Missionary Society <sup>1)</sup>”
- ④ “American Methodist Episcopal Church” (Bird (1880) II p.7)

となる。彼女があげた名称は教派、教団の名称が混在し、バランスがとれていない。①と②はバードにとってなじみの薄い教派である。①は広義の「ギリシャ正教」、東方正教会を現しているのだろう。②はローマ・カトリックで、③は CMS と呼ばれる英国聖公会の宣教団の一つであり、バードが世話になった宣教師デニングはここから派遣されていた。バードはていねいに組織の正式名称(当時)を綴っている。④はバードから見ると、わずか百年ほど前に英国聖公会から分かれた教派である。

次にバードは第 38 報で、函館では四つの組織が活動していると繰り返した上で、上記①と②について、今度は自分の目で見たであろうそれぞれの教会堂について記している。

この地で伝道活動を行っているキリスト教徒の四つの組織は、それぞれチャーチ・エディフェイス教会堂を建てたが、そのうち最も大きいのはローマ・カトリックのものである。また最も装飾性に富むのはハリストス正教会のもので、その壁面は絵でおおわれている。これまでのところ、改宗に非常に成功しているのはハリストス正教会で、ニコライ神父ただ一人だが、聖職位を授けられた日本人の助手が四、五人ついている。また先頃数人の修道女がやってきてローマ・カトリックの伝道会に加わったが、これによって同会はきっと大きな勢いを得るだろう。(完 3 - 31 ~ 32)

ここの「ローマ・カトリック」は原著で“Romish”である。カトリック教会についてバードは他に“Roman Catholic” “Roman Church” という呼称も用いている。ここの“Romish”は敬意を欠いた呼称である。バードは当時の英国の一般人の常として、呼称の統一や選択基準はあまり気にしていないようだ。

“Greek” Mission も同様である。元来、東方正教会は原則的に一国に一つの教会組織を置く土着主義をとっている。ロシア正教はロシアの地でギリシャ風でもラテン風でもない独自の発展を遂げ、15世紀半ばにはすでに完全な自治独立の組織体になっていた。にもかかわらず、19世紀の時点で英国人はこの程度の認識である。「正 (Orthodox)」教会という語が英国人に受け入れ難いのか、「ロシア」という語を用いたくないのか不明だが、これはバード個人の問題ではない。彼女は日本の旅を終えて英国に戻った後、十分な推敲期間を経て旅行記を出版したのだが、本人もまた出版社も、英国聖公会と縁の薄い宗教組織については正確な呼称にこだわるつもりはなかったようだ。

バードは函館においてはデニングの活動のみを述べ、他教派についてはこれ以上はまったく触れていない。正教会については以下に詳述するので、ここでは残る二つの教派について述べておく。④のメソジスト監督派は、アメリカ人ハリスとその妻を中心として宣教活動がなされていた。ハリスとデニングの関係は良好で、彼らは札幌農学校の生徒たちとも接していた。1879(明治12)年の函館の大火で両教派の教会が焼けた時は合同で礼拝を行ったという記録がある(日本聖公会北海道教区1966 p.15)。②のカトリックの修道女3名<sup>2)</sup>はシャルトル聖パウロ修道女会から派遣されていた。

## 1.2 バードは函館ではニコライを見かけてはいない

前掲のバードの文章(完3-31)には曖昧な点がある。当時の西部地区はごく狭い範囲だから、教会の建物はいやでも目につく。バードは少なくとも正教会、カトリック教会の外観は見ただろう。彼女が実際に正教会の内部の壁が絵でおおわれているのを見たのか、ロシア人司祭や修道女に実際に会ったのかどうか、この文章からははっきりしない。(原著英文も同様。)  
「バードは函館でロシア人司祭らを見た」ともとれるし、「正教の宣教は一般的にニコライとその周りについている四、五人の日本人とで行っている」とも説明している」とも解釈できる。そのすぐ後の文は函館の修道女について述べているが、これも同様にバードが自分の目で見たのか、それとも単に知識の紹介として書いたのか判断できない。

では、バードが実際に正教の司祭らを見かける可能性があったのかどうか

をここで検証してみたい。バードの来函時 1878 (明治 11) 年の 6 年も前にニコライはすでに函館から東京に居を移していた。この時点で在日ロシア人宣教師はニコライの他に 2 名いた。ニコライの後任アナトーリイと、東京在住のチャーエフ<sup>3)</sup>である。同年、ニコライが函館に赴いたという記録はない。函館教会のアナトーリイはその年の 7 月に 5 人の日本人司祭・輔祭候補者 5 名を連れて函館を發ち、彼らの叙聖<sup>4)</sup>のためにウラジオストクを訪れていた。ニコライはバード初来日時約半年後にあたる 12 月に、ロシアの宗務院にあてた宣教報告書を書いている。それによると、アナトーリイ一行は帰りは商船に乗って、まず長崎に戻る予定であったが、おりよくウラジオストクから函館に向かうロシアの軍艦に便乗させてもらうことができ、時間と経費が非常に助かったと記されている。(ニコライ 1879 [1993] p.90) 帰函の日付は不明。)

もしバードが彼女自身の目でロシア人司祭と 4、5 人の日本人聖職者を見たのなら、それは稀有な機会であった。それはロシアから函館に帰ったばかりのアナトーリイと日本人の新司祭・輔祭 5 名である。なぜ稀有なのかというと、彼ら 5 人は函館に長くとどまることはなく、一刻も早く東京に戻らねばならなかったからだ。彼らはニコライの指示を受けてから北日本に赴き、受洗を待ち受ける多くの日本人に洗礼を施さなければならなかった。とはいえ、アナトーリイから函館の宣教状況を聞き、街を見回る程度のことはしただろう。

デニングの来函は 1874 (明治 7) 年、ニコライの離函は 1872 (明治 5) 年なので、二人の在函期間は一致しない。しかし、当時の各教派の在日宣教師ならニコライを知らない者はいなかった。また、狭い函館の町で僧衣を見ればお互いに素性がわかる。堂々たる偉丈夫であるニコライと、アナトーリイの外見はかなり異なる。バードがデニングに「今日、こんな西洋人を見かけた」と話せば、彼はそれが東京から来たニコライなのか、または函館に住むアナトーリイか確実に識別できたはずだ。つまり、バードはここで直接の観察と伝聞の別を明確にせずに曖昧な記述をしていることになる。

### 1.3 個々の日本人信者に関心を払わないバード

西洋人の宣教師は、言葉の問題、土地・建物の貸借、所有等に関する外国人の制限などで、どうしても日本人の協力者が必要だった。バードは新潟でファイソンの元にいる「牧岡鉄弥」という日本人に会っている。彼はカテキスト（伝道師）として雇用されていた。バードは牧岡について「非常に精力的で聡明な（原著“very energetic and intelligent”）日本人の伝道助手がいる」「この人も巡回説教を行い、かなりの聴衆を集める」（引用2点 完2-23）と記している。

次にバードはデニングの元にいる小川<sup>おがわきよし</sup>淳（当時22歳）に会い、「きわめて聡明な（原著“remarkably bright”）日本人福音伝道者」と牧岡に関する記述と同じような形容をしている。「<sup>サムライ・クラス</sup>士族」出身（引用2点 完3-32）」とも断っているので、小川が士族であることは知っている。彼女はそれ以上のことは記していない。デニングの元にもう一人いた秋田の藩士寺田藤太郎についてはまったく記述がない。日本人がキリスト教に導かれるように強く願っているバードだが、彼女の宣教報告はどの地においても個々の日本人信者に興味をまったくといえるほど持っていない。宣教師と日本人信者の間で交わされた興味深い会話は、ファイソン、デニングに聞けばいくらでも語ってくれるだろう。バードがもし、小川を例にひいて彼らの内面に踏み込めば、彼女の考えにかなった「異教徒が正しく光明に導かれている一例」になったはずだ。

小川は会津藩士の家に生まれ、12歳の時に会津戦争で父と兄二人を失い、15歳で函館に渡って開拓使函館支庁の役人杉山孝治に引き取られた。杉山は外事関係の仕事を担当しており、通訳、翻訳家の育成も彼の仕事の範疇であった。小川がデニングに日本語を教え、代わりに英語を習うようになったのは杉山の計らいであろう。ところがこの試みは杉山の面目を失わせる結果になった。一年も経たない1875（明治8）年、小川はデニングにより受洗したのである。小川がキリスト教のどこに引かれたのか、文字による記録はない。以下に同じ会津藩士の若者の例をあげる。

井深梶之助は小川より2歳年長である。藩校である日新館学頭の長男として生まれ、「学問に励み、将来薩長を見返す」という野望を強烈に保持し

ていた。その彼は遊学先の横浜で様々な見聞を広げるうち、「隣人愛」「神の前に人は平等である」「敵を愛す」という聞いたこともないキリスト教の概念に触れて衝撃を受け、ついには宣教師ブラウンから洗礼を受けた。小川が洗礼を受ける2年前のことである。

洗礼を受けた小川は同年、さっそく官憲の取り締まりの対象となっている。この時はすでに1873（明治6）年の高札撤廃の後であるが、函館支庁から外務大臣寺島宗則への報告によると、小川は内澗町に家屋を借りており、説教のために人が集まって交通の妨害になったとのことである（鈴江2000 p.138）。これは明らかにこじつけである。しかし、鈴江も述べているように開拓使長官黒田清隆は確かに「耶蘇嫌い」で知られていたものの、函館で起こったキリスト教関係者迫害がすべて黒田の意向によるものとは言えない。明治政府自体がキリスト教に警戒心を解いていなかったのである<sup>5)</sup>。

若い小川はこのような困難にも負けず信仰を貫いた。男性の身内のほとんどが戦死したと思われる。武士として立派に死んだ先祖の崇拜を許容しないキリスト教をどう受け止めたのか。彼はその頃結婚して妻も洗礼を受け、精神的に安定したようだ。この夫婦は後述するように1875（明治8）年に函館近郊の大野村に居住する。

## 2. 英国人とロシア人

### 2.1 デニングとニコライの反目

明治十年代の函館の宣教上の特徴はロシア正教会の存在である。バードもさすがに「これまでのところ、改宗に非常に成功しているのはハリストス正教会で（前出1.1）」と書いている。これはもとはデニングの意見であろう。

当時、どの宣教団も「せっかく蒔いた種を他教派に取られてしまう」ことを嘆いていた。受洗を希望するまでに育てた日本人に次に会ってみると、他教派の司祭から受洗していることがままあったのである。次に述べる宣教師時代のデニングとニコライの反目は、そのような事情も反映している。

まず、正教会の見方から述べる。ニコライは前述の報告書で函館の状況に

触れ、

プロテスタントの宣教師たちは最近函館に次々と赴任していつている。カトリックの宣教団も次第に増強されつつある。彼らは巨大な聖堂を建て、函館の町の最高の場所に土地を購入し、女学校用として外国風の建物を建て、その運営のために修道女たちを定住させたりといったことをしている。(ニコライ 1879 [1993] p.103)。

と述べている。ニコライは聖公会を簡単にプロテスタントに含めているか、あるいは無視している。カトリックの活動についても勘違いがある。たとえば、修道女は学校経営を直近の目的として来日したわけではなく、当時は困窮した人々、特に孤児の救済にあたっていたのである。このように、他教派の事業については情報も乏しく、誤解や嫉妬の感情もあり、お互いに正確な状況を把握することは難しかった。

ニコライは幕末 1861 (文久元) 年に函館のロシア領事館付の司祭として来日した。いわば国家公務員であったから、職務以外には日本語の習得と日本文化をじっくり学び、ひっそりと正教の宣教にも努め、澤辺琢磨、旧仙台藩士らの日本人信者を獲得していた。東京に居を移してからは宣教の本格的準備を進め、西洋人の受け取りかたではキリスト教解禁である高札撤廃以降は、活発な宣教活動をしていた。東京移住後は欧米人の宣教師と広く交際を持ち、聖公会の数人の宣教師とも親しかったが、デニングは例外である。

ニコライはデニングの在函期間に二回、函館を訪れている。一回目は 1875 (明治 8) 年 7 月で、この時はカムチャッカ主教パウエルを函館に迎え、澤辺琢磨を叙聖してもらうための立ち会いであった。二回目は 1882 (明治 15) 年 8 月の巡回である。これはデニングが英国の本部に召喚される数か月前のことである。

ニコライは後年の 1901 (明治 34) 年 10 月 2 日の日記に思い出話として、函館でデニングと会った時のことを記している。その年月日は残念ながら書かれていない。元々、その日の日記でニコライが述べたかったことは、現在、キリスト教を攻撃してやまない元宣教師デニングへの怒りである。思い出話は以下のように始まる。

(大野注：デニングは) 熱心な宣教師として、自分と同じ教会に属して

いない者はみな悪魔だと見做していたほどだ。わたしも、函館で彼が説教している家を通りすぎたとき、「ほら悪魔の登場だ」と窓越しにからかわれたことがある。(ニコライ 2007 vo.7 p.46)

ニコライはこの後、『ジャパン・デイリー・メール』に匿名で掲載されたファイソン中傷の記事はデニングの筆になるものであるとし、「記事には見るべきキリスト教批判もないし、あるわけもないが、記事から憎悪がにじみ出ており、デニングの魂に巣くった七つの悪霊の顔が見えるようだ(同書 p.46)」と憤懣をぶつけている。

二人は互いに「悪魔」「悪霊」と呼び合っている。聖職者が不快な者をこう呼ぶことは珍しくないが、それにしてもいささか子供っぽい。この遭遇が函館での2回のチャンスのうち、どちらなのか確定はできないが、第一回の1875(明治8)年、30歳にならないデニングが来函してまだ一年強で、燃えさかる火のように精力的に宣教活動をしていた時の印象がある。ニコライが長年過ごした函館の坂道を懐かしみながら歩いていると、家の中にいたデニングから急にこのような嘲りを受けたのであろう。

## 2.2 英国人の正教に対する無関心、否定

当時の英国人は一般的に正教そのものに無関心であるか、または否定的であった。それにはまず、国と国の関係が影を下ろしている。当時の英国にとって、東方正教会を代表する国となったロシアは「広大な国土と強大な軍を持ち、なおも領土を広げようとしている強欲な国」であった。英国総領事パークスも自国の植民地拡大意欲は脇に置いて、明治政府に対してロシアには用心するよう、常に吹きこんでいた。

また、英国人は正教の礼拝は前近代的であると見なしていた。司祭らの祭服は豪華で儀式は複雑で長く、用いる言葉は教会スラヴ語で、一般のロシア人には理解できない。当時、ロシアの庶民の非識字率は非常に高かった。彼らは聖書も読めず、聞いてもわからない祈りの言葉を聞くことになるが、教会で荘厳な儀式に参加し、聖歌を聴くだけで信者は心の底から神を感じていた。それが合理主義の波に洗われた当時の英国人が正教を評価しない理由である。

### 3. 函館および周辺の宣教状況

#### 3.1 デニングの宣教の様子

16世紀に来日したフランシスコ・ザビエルは路傍伝道を重ねた。明治初期にはこれに加え、宣教師が隊を組んで行う大がかりな宣教方法も生まれた。教義を説明する以前に、まず人を集めなければならなかったからである。たとえば、日本人の伝道者が太鼓を叩いて人々に集会の通知をし、幻灯を見せ、その後に宣教師が説教をした。この点、特にアメリカのプロテスタントは宣教師の人数も多く、資金も比較的豊かだったので、目立つ工夫ができた。正教のある司祭によると、プロテスタントの宣教師たちは幻灯はもちろん、運び歩いているオルガンを下ろしてその場で演奏し、説教の中に世間話や面白おかしいことも入れて聴衆を惹きつけたという（山下2012 p.153）。

デニングは来日以前はマダガスカルで宣教活動をしていた。ここでの宣教事情はヨーロッパの宣教師にとって典型的なものであった。現地の宣教師は慈父であり、また家長的存在でもあった。改宗した現地の人々は経済的支援や無料の医療を提供され、宣教師を崇めた。しかし、日本ではすでに在日している宣教師も、新しく来たデニングもこの方法のみでは足りないことは承知していた。デニングは妻ヴィクトリアが積極的な性格ではないので、ファイソンのように家族総出で人目を引きつつ、日本人の関心を呼ぶことはできなかった。英国の宣教本部から見れば函館に男性宣教師が2人、神学生が1人、宣教師の妻2人と、計5人もそろっているのに、彼らが千葉、関西で見られるようなキャラバン活動をしなかったのは彼らの折り合いがよくなかったためである。

デニングは一人で路傍伝道を積極的に行った。時代と場所によってはこれは危険を伴う。投石などの暴力を受けることも少なくなかった。男性宣教師なら誰でも路傍伝道ができたとは思えない。路傍伝道をするためにはまず日本語が十分にできなければならない。教えを説くのみならず、ケンカを吹きかけられた時に言葉で返すためだ。バードは「宣教師が屋外で説教をするのは『適切』ではない。宣教師が『猿回し』や手品師などの放浪者と同じになってしまうからである（完2-23）」と記している。バード自身も来日以来、

たびたび「ロンドンの見世物小屋の出し物（大野 2016 p.348）」のように野次馬の目にさらされているので、彼女の懸念は大きさではない。しかし、デニングが札幌まで出向いて路傍伝道をした結果、札幌農学校の生徒伊藤一隆が近づいてきて 1876（明治 9）年に受洗した。これがデニングと札幌農学校とのつながりに発展していく。

大がかりな催しでは、彼は 1881（明治 14）年 9 月 8 日に会所町宝亭で宗教演説会を行っている。日本語の通訳つきで英語の説教が行われ、その後、英米の男女十数人がオルガンの演奏に合わせて聖歌を歌った。最後に外国の名所旧跡を見せる「写し絵」を公開した（『函館市史年表編』p.193）。この「米人」とは、メソジストのハリスの後任であるデヴィソンとその妻、女性宣教師ハンプトン、ウッドワースと考えられる。その他に避暑療養のために函館を訪れていた東京在住の女性宣教師ホルブルックが参加した可能性もある。

その他にデニングはキリスト教以外の講演をしばしば行い、人を集めた（大野 2018 p.100）。これは彼自身の好みにもっとも合っていた。例をあげると、1879（明治 12）年 11 月 8 日に内濶町<sup>うちまちよう</sup> 柏葉亭で演説会を催し、「学問の方法」と題する講演を行っている。他の二人の講義者とテーマは山田致人<sup>やまだむねと</sup><sup>6</sup>（物産論）、山本忠礼（郡区改正論）である。デニングは同年 12 月には函館文学会で講演を行った。また、神戸で発刊されていた『七一雑報』には、デニングが定期的に心理学の講習を行っていたことが 2 回記されている。

### 3.2 日本人信者の成長

このような演説会、講座に定期的に来る日本人は士族であってもなくても、一定以上の教養が求められた。バード来函の翌年、アナトーリイは秋田での巡回中に若い日本人から「意思の自由とは何か」「人間の魂と動物のそれとの違いはどこにあるのか」と聞かれたことを記している（長縄 2007 p.136）。デニングも札幌農学校の生徒や士族の若者からこのような質問を受け、盛んに議論していたのであろう。西洋の科学技術、進化論とキリスト教をほとんど同時に知った彼らにとって、キリスト教の必要性、絶対性ははじめから刷り込まれたものではなく、意識的に自分のうちに取り込むものであった。

とはいえ、当時は娯楽の少ない時代なので、何か珍しい出し物があると聞

けばとにかく行ってみる野次馬も相変わらず多かった。しかし、少なくとも函館の中心部では野次馬に過ぎなかった人間が教義を知るにつれ、態度を変えてくることもあった。以下は1874（明治7）年に函館に赴任したロシア正教会の若い司祭モイセイの記録（長縄2007 p.80～82）をまとめたものである。

彼は信者の家で夜、週二回行われるようになった勉強会に出席するようになった。ここにはすでに信者になった者、そうでない者数十人が集まってくる。家に入りきれない者は開け放してある戸の外で聞く。モイセイは、集まってきた人々は司祭（アナトーリー）が来る前、静かに煙草を吸ってぼんやりしているようにみえるが、実は今日、司祭に聞きたいことを頭の中で整理しているようだと書いている。信者がモイセイに上座を強く勧め、席の上下を巡って根比べのような譲り合いが繰り返される。彼が席に着いてしばらくすると子どもが彼の金色の刺繍のある腰紐におずおずと触ってくる。黙っていると、勇気のある子供が髪に触ったり、耳に触ったりし始める。司祭が来ると、集まった人たちは深く頭を下げ、それから教えを聞いたり、質問をしたりし始める。教会のこと、この集まりのこと、家庭のこと、日本人はよいことも悪いことも皆の前で話題にする。

モイセイの書きぶりは非常に温かい。「家の作りが四方に向かって開かれているように、彼らの心も四方に向かって開かれてい」と感心している。彼はこのような「夜の集まりを気に入って」て、「しばしば、大昔の原初教会にあった愛の夕べに思いを馳せることがあります」と記している。

この勉強会がなぜできたのかというと、この年1875（明治8）年にプロテスタントの宣教師が二人<sup>7)</sup>、函館に来て日曜ごとに自宅で説教を始めたからである。ここに正教徒となった日本人が聞きに行ってみると、イコンや聖人、祈祷などに違いがあることに気づき、それで自主的に勉強会を作り、司祭に教えを請うようになった。山村などではまだ、キリスト教を仏教の一派であると考えている人もいた時代である。キリスト教に心を惹かれた日本人は、偶然に出会った最初のその教派に惹かれていくことが大半だが、中には「比較してから入信したい」と希望する者も出てきた。

バードは内潤町に新しく出来た教会に来た聴衆について、煙草を吸った

り、出された軽食の皿を持っていたりはするが、3.3.2 で後述する大野村の講義所<sup>8)</sup>の聴衆と比べて「たいへんもの静かで、それほどぼたぼたしなかった(完3-34)」と記している。彼女はデニングの講義所に来る士族と「平民」を比較して「改宗者は平民ではなく彼らの中から生まれてきている(完3-193)」と記しているが、士族の人口はもともと少ない。どの宣教師もそれを理解しており、平民の信者の獲得にも力を入れていた。

### 3.3 大野村の講義所

#### 3.3.1 大野村と講義所

各宣教師は自国本部への定期的な宣教状況の報告義務がある。その地での活動成果を最も端的に表せるのが受洗者数であった。本国の海外宣教師本部の支持者たちはその数を見て寄付金を出す気になるのだから、数を競うのは当然である。そのため、前述のように平民への宣教が重要だった。バードの報告によれば、デニングは函館(西部地区)以外に隣接する農村地帯の大野、有川に講義所を持ち、定期的に来所していた。そして、七重にも新しく講義所を開こうとしていた。有川にはすでに正教会の日本人信者が作った講義所があり、着実に信者を獲得していた。

大野村(現 北斗市)とその周辺は江差松前に近い関係上、江戸時代初期から和人の定住が始まっていた。このあたりは北海道内では気候が温暖なほうで、農耕可能期間が長い。隣接する七重には勸業試験場が置かれていた。概ね平地で米作の他、勸業試験場の試験的事業として養蚕所、煉瓦製造所などが置かれてきた。人口はバード来函一年前の1877(明治10)年時点で2,480人である。もっともこの数は正確とは言えない。明治中期あたりまでは、北海道に移住はしたものの本籍地までは移していない者が多かったので、実際にはより多くの人々が住み着いていた。彼らはほとんど東北地方から移住してきた農民である。1914(大正3)年に編まれた『「大野村史」大正三年稿本』(飯田1970「風俗習慣」の項)によれば、住民の気質は概ね出身者の多い奥州の言語、習慣を踏襲し、「人情多クハ質素醇撲ニシテ家業ニ勉メ温順ニシテ礼儀篤シ」と書かれているのだが、バードが記した聴衆の様子とはかなり異なる。しかし、これは当日が祭礼の日<sup>9)</sup>で特別な事情があったた

めだろう。

この講義所のあった場所、開設年月についての記述は資料により一致していない面がある。『新大野町史』によれば 1876（明治 9）年に本郷 野本幸右衛門敷地を借りて講義所を作ったとされている（p.10）。バードの記述によれば説教を聞くために 300 人ほどが入室したというから、かなり大きな建物でなくてはならない。大野文化財保護研究会のリーフレットによれば、その場所は本町の大野橋近辺で上記の場所とは多少離れている。いずれにしても函館近郊に講義所を設けるために、まず日本人が住む住居として建物を借りるか建てるのが無難な方法である。受洗して時も経たない小川が、函館西部地区を離れて大野村に移り住んだのには、そのような理由がある。

デニングが賜暇休暇で帰国したのは、大野村の講義所開所の半年後 1877 年 2 月である。14 か月にわたる彼の帰国中は函館に赴任したウィリアムズ（大野 2018 p.98）にその運営を任せた。デニングは宣教師としてのウィリアムズも、神学生であるバチェラーも評価していなかったが、他に方法がない。デニングの留守中、ウィリアムズがたびたび講義所を訪れるのは当然として、新婚でもあることから妻メアリーを伴ったとしてもおかしくない。デニングはバード来函の 4 か月前に英国から函館に戻っている。

### 3.3.2 バードらの当日の行動

バードがデニング、外国人女性 2 名と大野村の講義所に向いたのは、金坂によれば 8 月 10 日（土）の可能性が高い（完 3 - 250）。前述のようにこの日は祭礼で地元の人々は日頃の農作業から開放され、浮かれ歩いていた。デニングの説教が夜 8 時から始まったのはそのためだ。バードは、人々が下駄履きのまま、板張りの教室になだれ込み、その中にはすでに酔っている者、大声を出す者、着物を脱ぐ者までいたというが、祭りの日の夜とあればそうなるだろう。この日の聴衆の大部分は祭りの最後の締めくりに「力強く辛抱強く話をする西洋人」を見に来たに過ぎない。バードはその状態にもひるまず情熱を込めて説教をするデニングの様子を詳述している。

バードらは 9 時過ぎに講義所を発った。夜間の乗馬は少なくとも女性にとっては非常識であった。一泊せずに帰ったのは、翌日が日曜日でデニングは礼

拜があったからだろう。連れの女性二人は誰なのか憶測を呼ぶが、そもそも選択肢はあまりない。函館在住の西洋人女性は極端に少ないからである。一人はデニング夫人ヴィクトリアであろうが、もう一人はウィリアムズ夫人メアリーと考えるのが妥当であろう。彼女はヴィクトリアのように消極的な女性ではなく、宣教師の妻として普通に活動をしていた。バードが名前を明記せずにこの二人の女性の存在だけを書きとめているのは、男性であるデニングと夜間、二人きりで出かけたという印象を読者に与えたくないためである。

ウィリアムズが同行しないのは不自然だが、それはデニングとの不仲のためである。デニングはバードの旅行記に彼の存在を出さないことを望んだのだろう。すると、当然そこには夫人メアリーの動向も含まれる。バードが自分からウィリアムズ夫妻に関する記述をあえてしないことは考えられない。バードが「外国の女性が [バードを含めて] 三人 (完3 - 33 [ ]) 内は訳者による補記)」としか記述していないのは、ヴィクトリアの名前だけを出して、もう一方の女性の名前を隠すことはできないからである。

帰路は彼女らの乗馬技術が低いため、難渋したとバードは記している。片道わずか 20 キロ程度<sup>10)</sup>の平坦な道なのに、午後 9 時に出発して午前 1 時過ぎに帰宅した。旅行家であるバードは特殊な服と自前の鞍を持ち、馬にまたがって乗ることができたが、それは当時、稀有なことであった。二人の女性はそんなものは持っていない。彼女たちは当時日本で購入することが難しかった女性用の鞍もなく、普通の鞍にいつものロングドレスで横乗り<sup>11)</sup>をしたと思われる。月光だけを頼りに夜間、馬を進めるなか、特に年上のヴィクトリアが落馬したのではないかと想像されるが、もしそうであってもバードはこれ以上、詳述するわけにはいかなかった。

## おわりに

バードは CMS に依頼されたわけではないが、結果的にデニングの宣教にかける情熱に感嘆し、その活動を詳述した。大野村に出かけた時の記録は何か所かに時間・距離の数字の誤りが見られるが、当時の講義所の聴衆につい

て詳述している点は他にあまり例がなく、貴重な記録になっている。この記録は前出『「大野村史」大正三年稿本』の、「村民之〔大野注：キリスト教〕ヲ信仰スル者少ナク僅カニ他地方ヨリ移住セル信者数戸アルニ過キサリキ（「教化」の項目）とつながる。

英国のCMS本部はデニングの宣教に対して多額の資金を提供してきた。本部の人々は1880（明治13）年にマレー社から出版されたバードの“Unbeaten Tracks in Japan”を嬉しく読んだに違いない。その2年後、デニングが本部から召喚され、ついには解任されると誰が考えただろうか。

バードは東北・北海道の旅を終えて東京に戻り、そこから関西に赴き、アメリカンボードの援助を得て人的・経済的に恵まれた多彩なプロテスタントの宣教活動を見ている。英国聖公会はその点どうかと言えば、なんとと言ってもアメリカの豊富な資金には勝てなかったし、女性宣教師の登用ではひどく後れを取っていた。バードは日本の自然描写、事物、日本の人物については感じたままを自由に書くことができた。反対に最も注意して執筆しなくてはならないのが宣教報告の部分である。書けることと書けないことがあり、帰国後の推敲に最も時間を割いた部分だと思われる。

バードが東北から北海道への旅の途上で会津戦争、箱館戦争の爪跡にまったく触れていないことを多くの人がすでに指摘している。戦争の原因や経過を紹介することはバードの関心外のことであったろうし、当時の女性にはふさわしくない話題だった。しかし、故国の人々に宣教活動の一端を語るのはバードの旅行記の目的の一つでもある。当時の日本で、自分自身の選択により新たにキリスト教徒になった人々の動機、それによってもたらされた社会的制裁による苦しみを伝えることは、問題なくレディ・トラベラーの記録の範疇に入るのではないか。バードは宣教を進める側に立って、その情熱、工夫、実態を書き表し、それは貴重な記録となったが、受け手の側には立たなかったと言える。

## 註

- 1) 英国聖公会宣教協会。CMS。当時の正式名称は Church Missionary Society、現在の名称は Church Mission Society

- 2) このうち少なくとも1名はデニングと協同事業も行ったようである(大野 2018 p.95、92 大野 2019 p.114 付記)。
- 3) チャーエフは来日してまもなく、また東京の神学校で教えてもいたため、函館に来る時間的余裕もその必要もない。
- 4) 司祭・輔祭にすること
- 5) 明治初期、函館に関して政府が特に注目していたのは、正教会の名の下に旧仙台藩士が結集しているように見えたことで、そのため正教会には厳しい迫害が繰り返された。
- 6) デニングから受洗した信者で愛媛県出身の士族。元開拓使の職員で七重官園に勤務、退職して大野村向野・観音山で牧場を経営したが、この事業は函館では時期尚早で不調に終わった。約20年後の1898(明治31)年にやはり聖公会信者である岡山峰吉が同地に移住し、かつて山田致人が果樹園を試みた地で苗床・果樹園を経営し、成功を収めている。
- 7) デニングとメソジストのハリスを指すと思われる。
- 8) 教役者を置く教会にまで育っていない段階の場所を指す。「講義所」「伝道所」「説教所」等、さまざまな呼称があるが、本稿では「講義所」に統一した。バードの原著では‘out station’。
- 9) 近在の意富<sup>おおひ</sup>比神社の祭礼の可能性はある。
- 10) バードは「25 マイル [40 キロ] (完3 - 34)」と記しているが、これは往復の距離である。
- 11) 「横乗り」「女性用鞍(サイド・サドル)」については大野 2016 p.345 注6) 参照

## 参考文献

飯田吉次郎編 1970『大野町史』大野町役場

牛丸康夫 [1978]1993『日本宣教史』日本ハリストス正教会教団 府主教庁  
大野純子 2016「レディ・トラベラー イザベラ・バードの成長と軌跡—  
“Unbeaten Tracks in Japan” 出版前後まで—」『大正大学研究紀要』100  
大正大学

\_\_\_\_\_ 2018「函館とイザベラ・バード(1)」『大正大学研究紀要』103

大正大学

\_\_\_\_\_ 2019 「函館とイザベラ・バード (2)」『大正大学研究紀要』104

大正大学

大野町史編さん委員会 2006 『新大野町史 資料編』北斗市

大野文化財保護研究会リーフレット <http://iruka.g.dgdg.jp/bunpoken/leaflet/leaflet..htm> 大野文化財保護研究会 (2020年04月11日閲覧)

工藤英一 1979 『明治期のキリスト教 日本プロテスタント史話』教文館

黒川知文 2002 「日本におけるキリスト教宣教の歴史的考察 I」『愛知教育大学研究報告』51 (人文・社会科学編) 愛知教育大学

齋藤元子 2002 「翻訳資料『函館とアイヌ集落』: 明治期来日アメリカ人女性宣教師の蝦夷探検記」『お茶の水地理』2002年7月15日 お茶の水女子大学

\_\_\_\_\_ 2009 『女性宣教師の日本探訪記 明治期における米国メソジスト教会の海外伝道』新教出版社

鈴江英一 2000 『キリスト教解禁以前 切支丹禁制高札撤去の資料論』岩田書院

田辺陽子 2018 『英国聖公会宣教教会の日本伝道と函館アイヌ学校』春風社

長縄光男 1997 「《ニコライ堂遺聞》明治初年の函館正教会点描 (下)」『地域史研究はこだて』26号 函館市史編さん事務局

\_\_\_\_\_ 2007 『ニコライ堂遺聞』成文社

中村健之介 2007 「解説『宣教師ニコライの全日記』」『宣教師ニコライの全日記』第1巻 教文館

名取多嘉雄 2011 『明治期における日本聖公会の千葉宣教』三恵社

\_\_\_\_\_ 2015 『明治期、英国人宣教による千葉宣教を追う』文芸社

ニコライ [1879] 1993 『明治の日本ハリストス正教会—ニコライの報告書』中村健之介訳編 教文館

\_\_\_\_\_ 中村健之介監修 2007 『宣教師ニコライの全日記』第4巻、第7巻 教文館

日本聖公会北海道教区歴史編纂委員会 1966 『教区九十年史』日本聖公会

## 北海道教区

函館市史編さん室編 1990『函館市史 年表編』函館市

\_\_\_\_\_ 1990『函館市史 通説編』第二巻 函館市

函館ハリストス正教会史編集委員会 2011『函館ハリストス正教会史一冊  
使徒日本の大主教聖ニコライ渡来 150 年記念』函館ハリストス正教会  
史編集委員会

バード、イザベラ 2012～2013『完訳 日本奥地紀行』1～4 金坂清  
則訳 平凡社

山下須美礼 2012「明治初期ハリストス正教会における仙台藩士族の西日  
本伝教」『歴史人類』40 筑波大学大学院人文社会科学研究所歴史・人  
類学専攻

『七一雑報』6巻51号 [1881] 1988 明治14年2月23日 不二出版

『七一雑報』7巻25号 [1882] 1988 明治15年6月23日 不二出版

Bird, Isabella L. 1880 “Unbeaten Tracks in Japan: An Account of Travels in  
the Interior Including Visits to the Aborigines of Yezo and the Shrines  
of Nikkô and Isé” vol.1, 2 John Murray, London

## 付記 1

前稿「函館とイザベラ・バード (3)」に関してベーマー会副会長 上野昌  
美氏より次のご教示をいただいた。1884 (明治 17) 年に宮部金吾 (当時、  
札幌農学校助教、植物学) が幌泉を訪れた時、当地の漁民からプラントハン  
ター マリーズの話聞いた。1879 年 [大野注: 1877 年が正しい] にこ  
こを訪れたマリーズは自分の採集物を載せた船が沖で沈んだとの知らせを聞  
き「號泣しぼし面を擧げ得なかつた」という。宮部は植物学の専門家として  
「その心情、思ひて餘りあるものがある」と同情している。(宮部金吾博士記  
念出版刊行会 1953『宮部金吾』p.123)

## 付記 2

以下、お詫びして訂正します。

前稿「函館とイザベラ・バード (3)」p.181 5 行目 誤「胆振」→ 正「日高」